

共同研究 日本常民文化研究所所蔵資料からみる フィールド・サイエンスの史的展開

期間：2016年～

〔所員〕 泉水英計 小熊 誠 佐野賢治 高城 玲 平井 誠 廣田律子

2019年度の活動

泉水 英計

共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」は、国際常民文化研究機構の第一期共同研究プロジェクト「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と、同じく「第二次大戦中および占

領期の民俗学・文化人類学」を通して学史への関心が深められたこと、また、アチック・ミュージアム時代から研究所に蓄積された非文字資料と民族学振興会運営資料の整理が進捗し比較的円滑な利用が可能になったことから、民俗学と文化人類学およびこれらの隣接諸学の史的展開への探索を目的として企画された。

2019年度は、(1) 4回の公開研究会、および(2) 本共同研究を踏まえたシンポジウムが開催され、(3) 所蔵資料のデータ化作業が進められた。



写真1 第8回公開研究会 馬淵氏の書簡を解説する山路氏
(2019年5月17日)



写真2 第9回公開研究会 清水昭俊氏 (2019年6月28日)

(1) 公開研究会

本年度最初の研究会は、2019年5月17日に、「アナキスト？ 構造主義者？——国際的人類学者・馬淵東一とフィールド・リサーチ——」という表題のもと、台湾および沖縄のフィールドワーカーとして海外にも知られた馬淵東一の研究の展開について、山路勝彦氏が、同じフィールドに赴いた弟子ならではの評伝を混じえて解説した。

つづいて、6月28日に清水昭俊氏が、

「岡正雄と民族研究所設立運動」と題し、文化人類学の戦争協力として語られることの多いこの運動について、新資料も加味し当事者の視点に立った再解釈を試みた。岡の決断についてその帰結を前提には論じられないという批判は説得的であった。

7月19日には、清水展氏が、「自文化のエスノグラフィー、またはアメリカの影の下の自己形成——山口百恵、小泉純一郎、そして私のなかのヨコスカ原風景——」と題し、民族誌のテキスト批判を超えた調査フィールドと人類学者の関係性について自身の経験を踏まえて語った。

当年度の最後の研究会は11月22日、藤田佳久氏「東亜同文書院生の中国大(調査)旅行と描かれた近代中国」であった。藤田氏は、戦後の政治的偏見により閑却されてしまった先駆的な実地探査記録の再評価を訴えた。

(2) シンポジウム

2019年12月に開催された本年度の常民文化研究講座・国際研究フォーラム「交差する日本農村研究——アチック・ミュージアムとジョン・エンブリー」は、本共同研究のメンバーが企画し、日本農村を対象にした民俗学および文化人類学について、内外の視点の交差、学術と実践の視点の交差という観点から顧みる機会となった。

(3) 所蔵資料のデータ化

『流通経済大学所蔵祭魚洞文庫目録』の効率的な検索を目的に、同大図書館と協議のうえ、目録情報のデータ化作業をすすめた。



写真3 第10回公開研究会 清水展氏 (2019年7月19日)

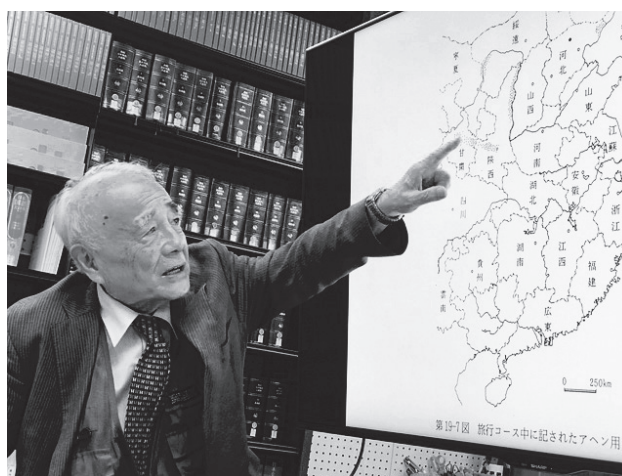


写真4 第11回公開研究会 藤田佳久氏 (2019年11月22日)

■ 2019年度の活動

- 第8回公開研究会「アナキスト？ 構造主義者？ ——国際的人類学者・馬淵東一とフィールド・リサーチ——」山路勝彦（関西学院大学名誉教授）2019年5月17日
- 第9回公開研究会「岡正雄と民族研究所設立運動」清水昭俊（国立民族学博物館名誉教授）2019年6月28日
- 第10回公開研究会「自文化のエスノグラフィー、またはアメリカの影の下の自己形成——山口百恵と小泉純一郎、そして私のなかのヨコスカ原風景——」清水展氏（京都大学名誉教授）2019年7月19日
- 第11回公開研究会「東亜同文書院生の中国大(調査)旅行と描かれた近代中国」藤田佳久（愛知大学名誉教授）2019年11月22日